

# 農福連携推進フォーラム報告書

日時：平成 29 年 3 月 24 日（金）13:30～17:00

場所：農林水産省 本館 7 階講堂

参加者：成川正幸

スケジュール：

- (1)開会あいさつ 農林水産省
- (2)基調講演 「農福連携の現状と課題」  
農林水産研究所企画広報室長 吉田 行郷氏
- (3)実践報告
  - ①「プロジェクトめむろ」新しい農福連携の形  
エフピコダックス株式会社 且田 久美氏
  - ②「ソーシャルファーム」農福一体の現場で未来を創る  
埼玉福興株式会社 代表 新井 利昌氏
  - ③「チャレンジ事業における施設外就労の形」  
長野セルフセンター協議会 沖村 さやか氏
- (4)情報提供 平成 29 年度の新たな取組(施策の紹介)
  - ④厚生労働省 社会・援護局 障害福祉課
  - ⑤農林水産省 農村振興局 都市農村交流課
- (5)意見交換  
地方自治体公民連携研究財団 島田茂氏  
エフピコダックス株式会社 且田 久美氏  
埼玉福興株式会社 代表 新井 利昌氏  
長野セルフセンター協議会 沖村 さやか氏  
厚生労働省 社会・援護局 障害福祉課  
農林水産省 農村振興局 都市農村交流課
- (6)閉会あいさつ 農林水産省

## 1.概要

農福連携は、農業と福祉双方の課題を解決し、利益をもたらす取組として注目を浴びており、福祉側のみならず、農業・農村の現場でも取組が拡大している。

農林水産省では、農福連携の支援策を講じると共に、厚生労働省と連携を図りつつ農福連携マルシェや農福連携セミナーを開催し、普及啓発に取り組んでいる。

このフォーラムでは、農福連携の現状と課題、企業等からの実践報告、行政による平成 29 年度の新たな取組などを紹介したあと、会場からの質問等で意見交換を行う。

## 2. 内容

(2) 基調講演「農福連携の現状と課題」農林水産研究所企画広報室長 吉田 行郷氏

障害者の実態を説明。

○障害者の居場所と就労の現状

・障害者の種類

| 種類    | 人数   | 備考                    |
|-------|--|-----------------------|
| 身体障害者 | 394 万人 (H27 障害者白書)                                   | 肢体不自由のほか、視覚障害、聴覚障害も含む |
| 知的障害者 | 74 万人 (同上)   | 知能指数 (IQ) が、70 未満     |
| 精神障害者 | 392 万人 (同上)  | 日常生活に制約がある状態          |
| 発達障害者 | 不明 (PDD は全人口の 1~2%、ADHD が学童期児童 3~7%、学習障害は全人口の 2~10%) | 先天的な脳の機能障害            |

・就労している障害者数

| 区分                                   | 人数                |
|--------------------------------------|-------------------|
| 従業員 5 人以上規模の事業所による雇用者                | 約 45 万人 (H27.6.1) |
| 障害福祉サービスを受けている者 (就労系)                | 約 24 万人 (H26.10)  |
| 18~64 歳までの在宅者                        | 約 255 万人 (H25)    |
| 18 歳未満、65 歳以上で働いていない人、入所施設、入院、入監(※)等 | 約 540 万人          |
| 障害者合計                                | 約 860 万人 (H26)    |

※新規受刑者の約 3 割が知的障害者

| 区分      | 人数               |
|---------|------------------|
| 生活保護受給者 | 約 216 万人 (H28.1) |

・就労している障害者の工賃 (賃金)

単位：円

| 施設種類       | 月額     | 時間額            |
|------------|--------|----------------|
| 就労継続支援 B 型 | 14,437 | 178 (農業だと 400) |
| 就労継続支援 A 型 | 69,458 | 737            |
| 就労継続支援平均   | 22,898 | 276            |

・障害特性と農作業の関係

| 種類    | 利点                                     | 欠点  |
|-------|--|---|
| 身体障害者 | 判断能力は高く、作業管理で魅力を発揮する人もいる。              | 手足の不自由な人は、ほ場での作業ができない。                            |
| 知的障害者 | 体力を必要とする作業をおこなえる。単純な作業でも集中力を持続できる人がいる。 | 判断が難しい人がいる。                                       |
| 精神障害者 | 判断能力が高い。                               | 長い時間の作業が苦手。集中力が持続しない人もいる。                         |
| 発達障害者 | 点検、計量、細かい作業が得意な人がいる。                   | 対人関係が苦手。同時並行多重処理ができない。手先が器用でない人、落ち着いて座ってられない人もいる。 |

・実際に障害者がおこなっている農作業の特徴

作業を切り分け、複数の障害者が、それぞれが得意な作業を行うことでチームとして対応。障害者ができる作業を切り出し手伝ってもらうことで人手不足を解消。

**農業関係**

○日本農業の担い手の現状

- ・基幹的な農業従事者は減少し、高齢化が進展している。
- ・基幹的な農業従事者の平均年齢は 66.5 歳、農業就業人口も、わずか 20 年足らずで、歯 Y 供半数に減少。

○農地の維持・管理の現状

- ・ほぼ富山県と同じくらいの面積 42.4ha

**福祉関係**

・農業活動に取り組む障害者福祉施設は増加傾向。近年では 1/3 施設が農業活動に取り組んでいる。

- ・障害者への効果

| 種類    | 効果                                    |
|-------|---------------------------------------|
| 身体障害者 | リハビリテーション効果による身体能力の向上                 |
| 知的障害者 | ストレスを発散し、不規則な睡眠や問題行動を減らすことで、障害者の生活の安定 |
| 精神障害者 | 癒し効果、精神名でのリハビリテーション効果                 |
| 発達障害者 | 問題行動を抱えている人の生活が安定。精神面でのリハビリテーション効果    |

**企業関係**

- ・特例子会社数 422 社のうち、農業分野に進出しているのが 32 社。

32社のうち、農業が主たる経営部門になっているのが5割弱。露地野菜作が中心の会社は2社。

○今後の可能性と展開方向

・障害者が働ける他産業での就労先で不足し、就労する能力があるにもかかわらず自宅待機になっている。

・障害特性から就業できなかった障害者が、多様な仕事がある農業分野では、障害特性に合った働き場所を見つけられる可能性。

・精神障害が軽くなったり、集中力や根気がつくことで、他産業での就業が可能になる障害者が増加する可能性。

○阻害要因

・障害者は仕事が出来ない。

・農業は集中力が必要で複雑そう。

・農業者と福祉事業所の出会いの場の欠如

○求められる支援

・お互いの誤解を解く。マッチングする。働き方を学ぶ。

(3) 実践報告

①「プロジェクトめむろ」新しい農福連携の形

エフピコダックス株式会社 且田 久美氏

## 理念

「誰もが、当たり前のように働いて生きていける町を目指して」

～抜粋～

例え障がいがあろうがなかろうと、一人ひとりが、誰かや何かにとって「かけがえのない必要なひと」になれる場所や仕組みを、ここ、めむろで実現します。

プロジェクトめむろ 成功のポイント

出資企業へのプレゼンテーション実施に関する準備をアドバイザーと町が連携し徹底的に構築

## 魅力

・行政と企業、地域の広く深い強い連携

・農業に加工作業を組み合わせることによって、通年雇用を実現

・関わる全ての人や機関に対して、提供するものと享受するものが明確にされている。

・障害者だけではなく、元気高齢者と地域健常者の雇用の場となっている。

福祉的視点とビジネス視点をバランス良く持ち合わせているコーディネーターの存在

・どの地域、どの行政であっても展開可能な仕組み

- ・すでに横展開が加速

エフピコ

- ①最低賃金補償
- ②フルタイム雇用
- ③65歳再雇用含めて雇用
- ④不当な解雇はしない

めむろからエフピコに！しつこさ、誠意をもって農業のまちのプライドから、まさか障害者雇用が出来るとは思わなかった。

エフピコグループ 4千人 めむろ 370名 (15%)

仕事がないと雇用できないので、取引先から雇用してもらおう。43社 600名  
必要な野菜 300t 必要でも 100t しか作れないので JA と提携。

農業サポーターの確保（高齢者就労）し、知恵ネットワーク・講習力・威圧感・巻き込み力を教えてもらう。

サポーターも怒る相手がいる、教育する相手がいる、条例を作ることでやりがい生きがいにつながっている。平均 74 歳。

A型・サービス管理者必要である。

- ・プロジェクトの目指す未来は

## 誰もが働いて生きていける未来

### ②埼玉福興株式会社

ソーシャルファーム～農福一带の現場で未来を創る～ 代表 新井 利昌氏

ソーシャルファームとは・・・労働市場で不利な立場にある人々の雇用を創出するための社会的ビジネススキーム

農福の利点

- ・利用者の関われる作業内容が多い。
- ・作業が分割しやすい。
- ・課題もあるが努力により、他の仕事に比べて売上げが伸びる可能性が高い。
- ・室内作業に比べて解放感がる。

- ・体をたくさん動かすため健康になる。
- ・利用者の増減に対応しやすい。

#### 農福の課題

- ・出荷の時期により、価格に変動がある。
- ・天候や病虫害により収穫量にむら
- ・雨の日などの作業の確保
- ・農地の確保
- ・作業技術の習得
- ・施設側の送迎時間などによる協力体制
- ・施設職員さんの農業へのモチベーション

#### 農副連携における課題

|    |                |  |
|----|----------------|--|
| 入口 | 連携を組む          | 福祉的資源・農業的資源・経営的資源を全て融合させ、協力し、それぞれの資源を活かすことのできる協働チームを作らなければいけないこと。  |
| 経過 | 「業」にする         | 農を「業」として実践するためには、各団体同士の「横のつながり」を強化し、もっている知識や技術や人の共有、作物にあわせた適地の共有、農機具の貸し借り、生産出荷安定のための業務体制構築をやらなければならないこと。   |
|    | 継続的・発展的サイクルを作る | 農福連携は、日本を支えること。お互いのもっている他の分野の技術の交換、高齢者さんから承継する「人」の育成をすること等が持続可能な仕組みを作ること。経済的には生産共同チームと、買取、販売企業との安定的な契約までのチーム構築を作り出し、作った農産物を確実に売れる <b>出口をつくる事</b> を目指す。 |

#### ③長野セルフセンター協議会 沖村 さやか氏

##### 悩み

| 対象  | 問題       | 詳細  |
|-----|----------|---|
| 農業者 | 繁盛期の人手不足 | 定植、収穫時に適当な時期が限られており、その時期は毎日でも来てほしい。半日ではなく、1日働いてもらいたい。 |
|     | 作業時間のずれ  | 蔬菜類等早期の作業は  |

|     |          |   |
|-----|----------|---|
|     |          | 時間を合わせて欲しい。                                     |
| 事業所 | 事業所の人手不足 | 工賃アップはしたいが職員の手が足りないから農園まで連れていけないし、作業も出来ない。      |
|     | 作業時間のずれ  | 午前 9 時~15 時 30 分の間なら対応できるが、その時間帯から外れると職員の負担になる。 |
|     | 障がい特性の理解 | スキル習得に時間がかかるので、育てるつもりで長い目で見て欲しい。                |

・事務局対応

|      |   |
|------|---|
|      |   |
| 労働時間 | 出来るだけ長時間働いてほしいという農業者の要求に対しては、午前組、午後組と分けられたり、複数事業所で対応。 |
| 工賃   | 農業者側と事業所側両方にメリット必要。                                   |
| 諦めない | ミスマッチに見えても続けることによって、お互いに理解できている場合もあるので、頻繁に現場情報入手。     |

・農作業で分かったこと。

|  |
|--|
| 施設外は農園から直接指導を受けるので、技術習得できる上、販路開拓の必要がない。          |
| 施設外は季節労働の為、感謝される上、労働力が直接工賃に反映。                   |
| 施設外は施設内より、地域に出て様々な方と作業するため、適度な緊張感もあり、礼儀等社会性の習得も。 |
| 慣れた仲間のチーム作業の為、利用者同士で協力し、個々より大きな力を発揮。             |
| 継続は力なり。地域力を育てるつもりで気長な対応を。                        |

(4) 情報提供 平成 29 年度の新たな取組 (施策の紹介)

厚生労働省 社会・援護局 障害福祉課

・農副連携による障害者の就農促進プロジェクト紹介

平成 28 年度予算額・・・106,545 千円

平成 29 年度予算額・・・200,340 千円（対昨年度△93,795 千円）

#### 趣旨

農業分野での障害者の就労を支援し、障害者の工賃水準の向上及び農業の支え手の拡大を図るとともに、障害者が地域を支えて活躍する社会の実現に資するため、障害者就労施設への農業に関する専門家の派遣や農副連携マルシェの開催等を支援する。

#### 実施主体

都道府県

※社会福祉法人等の民間団体へ委託して実施することも可能

#### 補助内容

工賃向上計画支援事業の特別事業において、「農副連携による障害者の就農促進プロジェクト」として以下の事業を実施することとし、補助率は 10/10 とする。

|     |                                |
|-----|--------------------------------|
| 農業側 | 農業従事者が減少・高齢化する中で、労働力として障害者に期待。 |
|     | 障害者への就労機会の提供により農業を通じた社会貢献ができる。 |
|     | 地域での取組によって、農地管理や規模拡大にも効果。      |
| 福祉側 | 障害程度や作業能力に応じた作業を用意することが可能。     |
|     | 自然とのふれあいにより情緒が安定。              |
|     | 一般就労に向けて体力・精神面での訓練になる。         |
|     | 地域の中で交流機会が出来、地域の中で必要とされる。      |

※良い物を作って大会収益、賃金にする。

・福祉施設が農業に取り組んでいない理由

- 1 位：農業の知識・技術がない。
- 2 位：農地を確保することが難しい。
- 3 位：人手が足りない。
- 4 位：販路確保が難しい。



・障害者就労施設において農業活動に取り組んだ結果、「精神の状況が良くなった。改善した。」と回答した施設は 57.3%。「身体が良くなった。改善した。」と回答した施設は 45.0%

・効果

1位：就労訓練

2位：地域住民との交流

3位：コミュニケーション向上

4位：自信が持てるようになった

・課題

1位：農業技術のある指導員・人材の確保

2位：農業技術への取得



## 必要な支援は農業技術指導

農林水産省 農村振興局 都市農村交流課

・農林水産省の施策には「産業政策」「地域政策」の2つがある。

農山漁村振興交付金 平成 29 年度予算案決定額 10,060 百万円

対策のポイント

農山漁村が持つ豊かな地域資源を活用した観光・福祉・教育等の取組や農山漁村への定住等を促進し、農山漁村の振興を図ります。

政策目標

平成 32 年度までに、都市と農山漁村の交流人口を 1,450 万人まで増加させることなどにより、農山漁村の自立発展を目指す。

<主な内容>

1. 都市農村共生・対流及び地域活性化対策 1, 4 4 7 (1, 9 1 5) 百万円

2. 山村活性化対策 7 8 0 (7 5 0) 百万円

3. 農泊推進対策 5, 0 0 0 (—) 百万円

4. 農山漁村活性化整備対策 2, 8 3 3 (5, 3 3 5) 百万円

交付率：定額、1 / 2 等

事業実施主体：都道府県、市町村、地域協議会、農林漁業者の組織する団体等

所感

会場いっぱいの参加者を見て農副連携の関心の高さに驚いた。

農業の後継者不足、障害者の就労先不足や収入、高齢者の雇用などを考えると、上手くつながると WIN—WIN の関係になると思う。

出来る事は何か、誰が困っているのか、課題解決は交流によって生まれるとあらためて思った。

黒部で農副連携の取組みが浸透するのかどうかは、お互いを知る事からだと思うので、上手くつながるように仕掛けて行ければと思う。

## 写真

